

2020年度第2回入学試験問題

国語

「始め」の合図があるまでは問題を見てはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は2ページから8ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・座席番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎかっこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

— 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

不貞腐れた顔で腕を組み、あぐらをかいている大輔を、勉強机のイスに腰かけ、茶子もまた膨れつ面で見下ろしていた。

大輔の前には、宗右衛門町のスナックが定休日だった茶子のおばが作つてくれた、たらこスパゲティの空き皿が二つ並んでいる。二人してひと言も口を利かずに食べきった皿には、ピンクのたらこ粒と、のりの切れ端がさびしげに貼りついている。

「やつぱり、僕は気に入らへん」

長い沈黙を破り、大輔は湿つた声でつぶやいた。途端、これまで溜めていたものを吐き出すように、細い目を吊り上げ、茶子は一気に言葉を放つた。「何で？ 何で、私が大輔に怒られるアカンの？」 だつて、あいつは許されへんことしたんやで。何されたか、まさか忘れたはずないやろ？ あのくらいいじや、まだまだ足りへん。いつそ鼻がもげてもいいくらいやわ」

「違う」

そうやないねん、と大輔は首を横に振つた。

「これは僕の問題や。茶子の問題やない」

「じゃあ、大輔はこれからもずっと黙つて我慢するつもりなんか？」 あいつにやられつ放しでも、じつと耐え続けるんか？ あいつは、大輔がこれまでどれだけ長い間、真剣に考えて、どれだけ覚悟を決めてセーラー服で学校に行つたかなんて、何も知らん。これからもずっと知らんやろ。そんな阿呆が

「茶子は間違つてる」

「何が？ どこが？」

茶子はひときわ声のトーンを高くして、大輔を睨みつけた。

「うまく言われへんけど……そうじゃないねん。僕には何となくわかる。ある日、何もかもがガラツと変わつて、すべてがうまくいくなんてこと、世の中では絶対にない。どんなものでも少しづつ、ちょっとずつ変わっていくもんやと思う。せやから……」

せやから、と続け、大輔は耳の後ろのあたりを乱暴に搔いた。

「ううん、上手に説明できへん。でも、茶子のやり方は違うと思う。むしろ騒ぎが大きくなるだけやと思う」

「何、今さらズルいこと言つてんの？」

茶子はこれ見よがしに舌打ちをして、イスの上に片膝を立てた。

「騒ぎになることわかつてて、女子の制服着て学校に行つたんは誰？」 なのに、自分で騒ぎを起こすだけ起こしといて、怒られるのは私？ 私だつて金曜日、蜂須賀が仕返しにくるんちやうか、つてずっと怖かつたんよ。正直言つて、大輔がセーラー服着て学校に行かんかつたら、こんなことにはならへんかったのに、つて一瞬思つた。でも、ホンマに腹が立つたから、許されへんて思つたから、あんなことしたんやで。大輔のためにしたんやで。それやのに——」

大輔を睨む茶子の瞳が急に潤み始めるのを見て、大輔は慌てて「わかってる、ごめん」と手を挙げて取りなした。

そのとき、部屋の襖がスッと開き、

「あらあら、喧嘩かいな？」

と茶子のおばの初子がお盆を手に顔を出した。

「大ちゃん、アンタ、ええときにもらつてん」

と初子は白っぽい色合いのアイスマナカが入つた皿を絨毯の上に置くと、代わりにスパゲティの皿を取り、「仲良くやで」と残し襖を閉めた。

大輔はお手玉ぐらいの大きさの、丸っこい形をしたアイスマナカを手に取り、茶子に差し出した。ありがとう、と茶子はくぐもつた声で受け取つた。アイスマナカは前歯で噛むと、みしりと皮が破れる感触とともに、すうとしたアイスマナカがやつてきた。

「おいしいな、ゼー六」

「うん」

二人は黙々と一個を平らげた。二つ目を茶子に渡し、大輔は残りの一つを手に取つた。

「僕はな、茶子に怒つてるんやない。僕は、暴力つていうか——そういうのが嫌いやねん。鼻を折るのは……やつぱり、やりすぎや」

茶子はモナ力の皮の表面を人差し指で撫でながら、「うん、わかってる」と小さくうなずいた。

「僕は単に、みんなに受け入れてもらいたいだけやねん。僕のこと鬱陶しいとか、気持ち悪いとか思う人がいるってこと、僕も理解できる。気持ち的に受け入れられへん、つてのもわかる。むしろ、それが普通かもしらへん。でも、僕みたいに見た目と中身が違う人間も世の中にはいる。ちょっと変かもしらへんけど、人間としての中身はみんなと何も変わらへん、つて知つてもらいたい——」

茶子はうつむき加減にアイスモナ力を齧りながら、黙つて大輔の訴えを聞いた。大輔は上目遣いに茶子の反応を待つたが、立てた片膝に頬を預けたまま、言葉を放つ様子がないのを見て、アイスモナ力を口に持つていった。白みを帯びた皮に前歯を立てるとき、ぱり、と軽い音が鳴つた。

「明日はどうすんの。またセーラー服で学校行くんか」
アイスモナ力を食べ終え、茶子は小さな声で訊ねた。
「それ、島にも訊かれた」
最後のかけらを口に放り、大輔は顔を後ろに回した。茶子のベッドを見下ろすように、壁際のフックにセーラー服がかけられていた。
「また、あんな目に遭つたらどうすんの。じつと我慢して、耐え続けるんか？」

「わからへん……。でも、もしもアイツの言うとおりにしたら——」
「アホッ！」
「いい加減、一人で戦つてるフリするんやめッ！」
肩をビクリと震わせ、正面に向き直つた大輔を、茶子は目を赤くして、イスの上から睨みつけた。

「そら、大輔の言うとおり、少しずつしか、物事は進まんのかもしれん。でも、大輔一人やつたら、その少しも進まんのやで。みんなが大輔を助けるから、進んでいけるんやろ。負けた？ アンタだけの勝負つてこと？ 私だつて、怖い思いして、いつしょに戦つてんやで。（注）おつちやんもおばちゃんも、きつとまわりにいろいろ言われてるやろうけど、知らんところでアンタのために戦つてんねんで。何でもかんでも一人でできるなんて、思い上がりなツ」

木曜日の一件について、担任の後藤にどれほど訊ねられても、大輔は蜂須賀の名を出さなかつた。何をされたかなんて思い出したくもなかつたし、それを口にするなど、絶対にゴメンだつた。大輔自身の意地もあつた。それに、たとえ教師が注意したところで、コントロールの効く相手ではないことは、学校じゅうの人間が知つてゐる。

しかし、ほんのわずかな時間、蜂須賀を目撃しただけで、大輔ははつきりと了解した。それらしいことを並べ、蜂須賀への感情を圧殺していたが、要は相手の仕返しが怖かつた——ただ、それだけだつたのだ。あの部室棟の前で、恐怖で身体がこわばり、口も利けぬまま、ひたすらうずくまつていた時間。長く、暗く、重い、絶望の時間。服を脱がされ、殴られ、蹴られ、石灰をまかれたこと。痛みよりも、2何か世界そのものを壊されたような感覚。未

大輔は顔を伏せたまま立ち上がつた。襖を開け、台所の机でDSをやつている初子に「ごちそうさまでした」と礼を言つて玄関に出た。
「大ちゃん、がんばりよ。おばちゃん、応援してるので」
商売柄ゆえ、少し割れた感じの初子の声を、靴ひもを結びながら、大輔は背中で聞いた。

家に戻る途中、榎木大明神に立ち寄つた。巨大な神木は影となつて空を覆い、鳥居の朱が闇ににじむように色を放つていた。鏡と小さな白蛇の置物が納められた祠の前で、大輔は手を合わせた。

「僕は——どうしたらいいかわかりません」

もちろん己さんは、何も答えてはくれなかつた。ただ、緩やかな風を受け、枝葉がさよさよと鳴るばかりだつた。

（略）

だ、ジャージの下に残るあざ。

黙目だつた。

これまで開くまいと念じていた記憶の扉が、校庭から明るいbカンセイが響く廊下でからんと開いた。大輔は壁際にもたれるように立ち止まつた。黒い、粘つこい泥流が、身体をぐるぐると回る感覺がした。窓を透過した日射しが、大輔の顔を白く照らしても、何ら肌に熱を感じなかつた。気がつけば全身が総毛立つてゐた。俄に吐き気がこみ上げた。

壁に手をつき、大輔は廊下をのろのろと進んだ。

今にして、大輔は思う。女子の制服を着て、学校へ行けたらどれだけしあわせだらう——と好き勝手に夢想していたときが、いちばん楽しかつた、と。セーラー服を纏うだけで、魔法のように、目の前を塞ぐ障壁が一気に取り払われる氣がした。長い長い夜が明けるように思えた。たつた一枚のスカートが、すべてを解決してくれる『希望』そのものに感じられた。

だが、どれもこれも、すべては錯覚だつた。希望どころか、現実はいよいよ闇を濃くして大輔を覆つた。霧の中で大輔はcロトウに迷い、あれほど苦痛だつた男子の制服を着ずに済むよろこびは、もはやどこにも感じられない。怯えた心を抱えた、無様なジャージを纏う己の姿は、ひたすらみすぼらしく、哀れだつた。

図書室の入り口をふらふらと通り過ぎ、突き当たりの非常口の前で、大輔は立ち止まつた。普段は開けてはいけないと言われている扉の鍵を回し、非常階段に出た。

らせん階段を屋上まで上り、錆びついた背の低い柵を開けた。安っぽい緑色のマットが、あちこち剥げたまま敷かれている屋上の中央で、大輔は膝に手をついた。

すり切れ、変色した緑のマットを見つめ、大輔はさつき食べたばかりの給食をすべて吐き出した。吐き終えてから、大輔は泣いた。

(万城目学『プリンセス・トヨトミ』〔文藝春秋〕より)

(注)「おっちゃん」は大輔の父、「おばちゃん」は大輔の母を指す。

問1 傍線部a～cのカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問2 茶子の「おば」である初子に関する説明として、正しいものには○を、正しくないものには×をつけなさい。

ア 大輔のことを心配するあまり、あえて言つてはならない言葉をかけている。

イ 大輔と茶子が険悪な関係にならないように、あえて二人の気をそらしていいる。

ウ 大輔に対して茶子が恋愛的な感情を抱いていることを、実はよく思つていいと思つてゐる。

エ 大輔のことを応援しているが、実は男子の制服を着て学校に行つて欲しいと思つてゐる。

オ 1に入ることばとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もう、茶子にあわせる顔があらへん
イ そないに、殴られへんのとちやうか
ウ 何というか、負けたような気がする
エ これ以上、みんなに迷惑をかけないですむ
オ きっと、後藤先生かて僕のことを見捨てるわ

問4 茶子は結局のところ、大輔のどのような言動に対しても怒つてゐるのですか。そのことについて説明した次の文章の〔①〕～〔③〕に最もふさわしいことばを、指定の字数で答えなさい。ただし、〔①〕は会話文中から書き抜き、「〔②〕・〔③〕」は自分で考えて書きなさい。

大輔は「「①（八字以上十字以内）」」と言うけれども、そうではなく、すでに「②（十字以内）」のである。ところが、その現実を大輔が「③（五字以内）」としないことに対し、茶子は怒つている。

問5 傍線部2 「何か世界そのものを壊されたような感覺」とあります。その説明として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大輔の理想も、それを思い描いていた大輔自身も完全に否定されたような感覺。

イ 目の前に立ちはだかる障害は、これからも大輔にずっとついて回ると宣告されたような感覺。

ウ 女性として生きていく幸せは、大輔が暴力を克服しない限り手に入れられないと通告されたような感覺。

エ 大輔の希望を実現するためにはスカートをはいて学校に行つてはならないのだ、と痛感させられたような感覺。

問6 この文章の内容として正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大輔は、女子の制服にあこがれを抱いてしまう自分の性質に対して、以前から悲しさを感じていた。

イ 大輔は、自分の置かれている状況をやつと理解することができ、解決の糸口を見出そうとして苦しんでいる。

ウ 大輔は、自分の考えが錯覚であると気づいたことによつて、茶子の言葉の真意を理解できるようになつていつた。

エ 大輔は、自分が見た目だけではなく考え方も独特な人間であることを、クラスメートにわかつて欲しいと思つた。

オ 大輔は、蜂須賀への恐怖心に支配されていることを思い知るとともに、自分の考えが甘かつたと強く感じるようになつた。

二 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。

常識的に考えると、**A** というものは **B** の後から現われる。社会を構成するメンバーや要素である個人がまずあって、そうした個人のあまりやつながらりとして社会が存在するというのが、多分ごく普通の考え方だろう。社会を構成する要素である個々人なしに、それ以前に存在する社会などという奇妙なものは、どこにも存在しないからだ。

だが、本当にそうなのだろうか？

私やあなたといった個々人の人生の具体的なあり方から考えてみよう。

アダムとイヴのような神話の中の「最初の人間」はともかくとして、私たちが生まれたときにはすでに、そこには「社会」——他の人間たちが作った関係や集団やルールや慣習——が存在していた。私たちはみな、自分に先立つて存在する社会の中に生み出され、その社会に組み込まれて、社会の構成員になつたのだ。こうした事実関係に即してみれば、社会は個人の後から現われるのでない。逆に、個人はつねに社会の中に産み込まれる。私の存在は、社会の存在に対していつも遅れて、社会の中で与えられるのだ。

生まれたばかりの赤ん坊は、さしあたり社会的な個人ではなく、生物としてのヒトの個体にすぎない。だが、そのヒトの個体としての赤ん坊は、生まれすぐに周囲の人間たち——すでに社会を生きている人間たち——によつて、息子や娘、子どもとして扱われ、子や孫といった親族関係上の位置や名前を与えられ、**C** の中の **D** “として扱われる。自分自身を社会の中の誰かとして自覚する以前に、周りにいる人びとによつて” **C** の中の **D** “にさせられるのだ。（略）

私自身もかつてそうだつたし、私の子どもも現にそなうなのが、幼年期の子どもは自分自身を言う「一人称」として、「僕」や「私」という言葉以前に「*ちゃん」といつた他者から名指される「一人称的な言葉」を使う。それは、人が社会の中で見出すのが、「自分にとつての自分」である以前にまず、「人から呼ばれる自分」であるからだ。「僕」や「私」という言葉を獲得した後でも、この間の事情は変わらない。なぜなら、「私」とは「他者から**と呼ばれる私」であるからだ。「あなたは誰？」と聞かれたとき、「私は**です」

というその名前。それは、私やあなたが他の人びとから呼ばれる名前や属性——学生だとか、主婦だとか、会社員だとか——である。別の言い方をすると、「私」という一人称は、人から「**」と呼ばれる存在を、当の存在が呼ぶときの呼び名であるということだ。「私」とは、つねに、そしてすでに「他の人びとの中の誰か」であり、「他の人びとにとつての誰か」なのである。

1個人がいつでも社会に対し遅れて、社会の中でその存在を与えること。それは、人がいつも他の誰かとのつながりの中で、自ら「私」と呼び、「僕」と呼び、「自分」と言う「誰か」になるのだということである。

この「つながり」について、もう少していねいに考えてみよう。

まず私は、他の誰かと同じ時間の中で、ある空間や場を共有して生きており、そこで誰かとのつながりの中に置かれている。家の中で、地域の中で、学校で、会社で、もっと広い社会の広がりの中で、私たちはそこにいる誰かとさまざまつながりをもち、そのつながりの中の「誰か」として、他の人と年齢といった属性に即した呼び名で他者から呼ばれ、そのような「誰か」として接せられ、応対される。そうしたつながりの中の私の位置や扱いが、私にとっていつも快適とはかぎらない。いじめや差別のように、どうしてもそこから抜け出したいような位置や扱いもある。そうしたひどい扱いや関係から抜け出ようとする私の存在もまた、そうした扱いや関係の中で、そうした関係の後から私の中に現われてくる。私が私を見出す「つながり」とは、私が自らの存在を見出すこうした状況のことだ。

こうしたつながりの相手は、必ずしも人間でなくともよい。犬や猫のようなペット、野山の獣や鳥、魚や虫でもいいし、家や田畠、山や川のような環境でもいい。神や精霊や魔物や死者のよう、現代人の多くから見ると想像上の存在であるものたちでもいい。たとえば農業社会では、人は他の人びと結びつくのと同じように、ときにそれよりもずっと強く大地と結びついている。狩猟採集する社会では、野山の動植物やその精霊とのつながりが、と

きに生身の人間とのつながりよりも大切だろう。現代の社会では、人とのつながりよりもお金とのつながりのほうが大切かつリアルだという人もいるかもしれない。ともかく、そのようなさまざまな空間的つながりの中で、人は「自分」を見出し、そんなつながりの中の「誰か」になる。同じ時間の中である空間や場を共有する人やモノとのこのようなつながりのことを、同じ時を共有するという意味で「共時性」や「共時態」という言葉で言い表わすこともある。

けれども、人が自分を「誰か」として見出すつながりは、共時的なつながりだけではない。右に私は「死者」とのつながりということを述べた。このとき「死者」という存在はどこにいるのだろうか。

注意してほしいのだが、私はここで「死体」のことを言っているのではない。死体、つまり死んだ人間の体は、いつも現在という時の中に現われる。エジプトのミイラは何千年前に作られたものだが、私にとってそれは「今、ここにあるよく保存された死体」である。それに対してここで「死者」と呼んでいるのは、死体になってしまった身体の中にかつては「生きた人間」の人格として存在していたが、いまやその身体が死体というモノになってしまったので、その身体から切り離して考えられる「死んだ人間」の人格のことだ。

ご先祖様とか祖先とかいうのがその典型である死者は、一方では現在に存在する共時的存在として現われる。たとえばお盆の迎え火をするとき、そこで迎えられるのは、「今ここに彼岸からやつてきた死者の靈」である。だが他方で死者は、過去に存在するものとしても考えられる。「私たちの先祖は……」とか、「祖先から繼承された伝統として……」とか言うとき、「先祖」や「祖先」という言葉で総称されるのは、かつて生き、けれども今は死んでしまつてもうここにはいない死者たちの群れである。だが、過去に位置するこの死者たちと私たちは、2時の隔たりを超えてつながっているものとして考えられている。言語が、文化が、知識が、伝統が、かつて生き、今は死んだ人びとから継承されて今あるものとして存在しているからだ。苗字といふのは、両親とのつながりを示しているだけでなく、その苗字を継承してきた今は亡き数知れぬ人びとのつながりの中に個々の人びとが生きていくこと

を示す3符牒のようなものだ。また「日本人」とか「韓国人」、「アメリカ人」や「フランス人」といった言葉が使われるとき、そこで意味されているもの現に生きている諸国民の共時的な集合体である場合もあるけれども、そのような共時的なつながりを超えた歴史的連続体としての人びとの群れを意味することもしばしばである。

私たちの生きている世界は、風景や町並み、建物のような有形のものも、その少なからぬ部分——分野によつてはほとんどの部分——が、すでに死んでしまった人びとによつて作られている。私たちは、その多くの部分が死者たちによつて作られた世界に生まれてくる。私たちが経験する「死者たちの作った世界」は共時的な現在である。だが、そのような共時的な現在を生きているということは、その世界を通じて私たちが死者たち、その個々の名も顔も知らぬ無数の死者たちとのつながりを、多くの場合は取り立てて意識することもなく生きているということだ。そうしたつながりを、歴史や時間の流れを通じての関係であるという意味で「通時性」や「通時態」という言葉で言い表わすこともある。

4 「私」という存在は、さまざまなものとの共時的、通時的なつながりの中の「結び目」のようなものとして存在している。それは、私という存在が「社会の中」に存在しているということだ。そしてそのことは、私やあなたが現にある私やあなたであることが、すでに社会的な関係の中で与えられる社会的な出来事であるということ、その中で私もあなたも、死者をも含んだ私以外の他者たちから与えられ、我のものとした言葉を使い、やはり他者たちから我のものとした慣習や道徳に従つて生きているということだ。とすれば、社会について考えるとき、その対象は法律や政治や経済の中に、そしてまたさまざまな「社会問題」の中にあるだけではなく、この私という存在や私の日々の営みの中にすでに存在しているのだということになる。

私は社会の中に、つねに社会から離れて現われる。私も、私の日々の生活も、社会の中で生じる社会的な出来事なのだ。

(若林幹夫『社会学入門一步前』[NTT出版]より)

問1 **A** → **D** に入ることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| ア A 社会 | イ A 社会 | ウ A 個人 | エ A 個人 |
| B 個人 | B 個人 | B 社会 | B 社会 |
| C 個人 | C 個人 | C 社会 | C 社会 |
| D 社会 | D 社会 | D 個人 | D 個人 |

問2 傍線部1 「個人がいつでも社会に対して遅れて、社会の中でその存在を与える」とあります。そのため、その最初の経験を本文中のことばを用いて、解答欄に合うように三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問3 傍線部2 「時の隔たりを超えてつながっているもの」とありますが、これと同じ意味で用いられていることばとして最もふさわしいものを、本文から六字で書き抜きなさい。

問4 傍線部3 「符牒」の意味として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 付録 イ 亡霊 ウ しるし エ お守り オ あいさつ

問5 傍線部4 「私」という存在は、さまざまなものとの共時的、通時的なつながりの中の「結び目」のようなものとして存在している」とあります。これを説明した次の文章の「①」、「②」に最もふさわしいことばを、本文中からそれぞれ指定の字数で探し、書き抜きなさい。

社会における「私」という存在は、「①（九字）」する人やモノとの共時的なつながりと、「②（八字）」を通じた死者たちとのつながりとが交わつたところに出現するものであるということ。

問6 この文章で筆者が言いたいこととして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 私たちの存在している世界は、死者によつて作られた社会である。
社会というものは、個人のあつまりやつながりによつて作られている。
現代社会では、お金のつながりよりも人とのつながりの方が大切である。
エ 私という存在や私の日常の営みも、社会について考えるときの対象となる。

「以下余白」

2020年度 第2回	国語	受験番号	座席番号	氏名	

問
6

問
5

問
3

問
2

問
1

問
5

問
4

問
2

問
1

1

ANSWER

問
4

になること。

八

問
6

問
6

(2)

1

ア
イ
ウ
エ
問
3

10 of 10

a
b
c

2

3

30

40

合計

